社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第25号　2013（pp.95-96）

【課題研究報告】

課題研究Ⅰ　初等社会科授業研究の理論と課題

（2013年２月10日開催）

馬　野　範　雄
（大阪教育大学）

１　課題研究の趣旨

本学会における授業研究は，解明研究，開発研究，解明開発研究，開発検証研究といった視点から研究が進められてきた。初等社会科を対象とした授業研究の傾向として開発研究，解明開発研究，開発検証研究といった開発関連研究が主になっており，解明研究がこれに続くことが指摘されている。課題としては，第一に，解明開発研究から開発検証研究までの一連の研究の推進，第二に，解明研究における解釈方法の科学化，開発研究における仮説と学習者の変容に関する検証，検証研究における検証方法の科学化が指摘されている。したがって，本課題研究では，「発表者の授業研究における解釈や検証は，どのような方法で行われているのか」「その方法は科学的と言えるのか」といった基本的な問いのもとに協議が進められた。

２　松岡靖氏（広島大学附属小学校）「『メディア社会解釈学習』における小学校社会科の授業開発」

松岡氏は，研究スタイルを「開発検証研究」として位置づけ，次のような基本的学習モデルの開発と，その実践に基づく検証方法を提案している。

⑴開発研究

メディア社会解釈学習は，次のように定義されている。

「児童が，メディアの問題状況を示すメディアテクストを切り口にして，メディアに影響を与える社会の構造を批判的に追究し，その影響を多方面に認識した上で新たな解釈を構築し，それを吟味することで，メディア社会における思考力・判断力・表現力を育成することをめざした学習指導論である」

⑵学習モデルの開発

①　目標

メディア社会について解釈することを通して，民主主義社会の形成者として必要な市民的資質（メディア解釈力）の基礎を育成する。

②　活動（方法）・内容

ⅰ問題設定場面…メディアの問題状況や学習問題を認識する。ⅱ構造分析場面…メディア生産者とオーディアンス（受信者）への影響やメディア社会の構造などを認識する。ⅲ解釈構築場面…認識内容の強化・相対化を図る。ⅳ解釈吟味場面…メディアに対する多面的な価値の認識や認識内容の修正と知識の再構成を図る。

⑶開発授業の検証

この学習モデルをもとに，５年単元「メディアによる風評被害」を実践し，次の３点について，抽出児童のワークシートの記述内容をもとに，分析・考察を行っていた。

①　メディア社会の構造に対する価値認識の状況

②　メディア社会と既存の社会との比較による価値認識の変容

③　児童の発達段階に関する考察

３　井上伸一氏(大阪教育大学附属池田小学校）「サウンドスケープ論に基づく地域安全サウンドマップを用いた社会科安全学習の開発」

井上氏の研究も「開発検証研究」であり，次のような学習モデルの開発と，その実践に基づく検証方法を提案している。

⑴開発研究

本研究は，サウンドスケープ論に基づく地域安全サウンドマップを用いた社会科安全学習」は，

望ましい音響コミュニティを構築する際に発揮する危険回避能力を育成することを目的としている。

⑵学習の論理（学習モデルの開発）

① 体験的な学習活動によるサウンドスケープの調査・分析－

◇「音と安全」1時間

日常生活の中の音と安全・危険な環境との関係を考える。

◇「音と安全のフィールドワーク」4時間

音と安全のフィールドワークを通して，安全・危険の視点で音の調査を行い，環境との関係を記録表に記入する。

② 音情報の位置づけ，関連づけ，意味づけ，サウンドスケープ・デザインの知識に基づく価値づけ

◇「地域安全サウンドマップ」3時間

地域安全サウンドマップを作成し，音から考えられる安全・危険な環境について考察する。

⑶開発授業の検証

この学習モデルのもとに6年生で授業実践を行い，次のような方法で検証を行っていた。

① 地域安全サウンドマップや板書の分析による知識の意味づけ，関連づけの評価

② プレテスト・ポストテストの実施による社会認識の広がりについての量的分析

③ 別の事例テストの実施による知識量の変化の分析

4 坂井誠亮氏（北海道教育大学旭川校）「授業の対話場面から見える子どもの思考について」

坂井氏は，「子どもの発言から『思考・判断』が表現されたものを瞬時に評価し，次の指導に生かしていくためには，『思考・判断』が表現されたものであると評価するための枠組みを持つ必要がある」との問題意識のもとに，次のような『思考・判断』を活用する場面を設定した。

①「なぜ疑問」の発見・把握

② 予想・仮説の設定

③ 資料をもとにした検証

④ 新たな社会事象への応用

⑤ 深まった問いの発見・探究

⑥ 価値分析・未来予測

⑦ 日常生活への適用

坂井氏は「解明研究」の立場から，『思考・判断』が表現されていると思われる10実践を，この7つの活用場面に分類し，思考判断の根拠と教師の働きに整理していった。

その結果，次のような点を明らかにしている。

① 「思考・判断・表現」を見取り，指導に生かしていく上で，子どもの生活経験に着目していくことが大切である。

② 検証場面では，具体的に因果関係を思考していくことが大切である。

③ 価値分析・未来予測や生活化を図る場面では，反論を示した発言に着目していくことが大切である。

4 指定討論者；加藤寿朗氏（島根大学）のコメント

加藤氏からまず，本課題研究の主題を受けて，次のような3つの論点が示された。

① 社会科授業研究のあり方を論ずるにあたって初等・中等の学校段階の違いをどのように捉えるのか，方法論は同じなのか異なるのか。

② 授業研究の科学化を方法論としてどう捉えるのか，具体化するか。

③ 授業研究の成果をどのように公表すればより授業改善に資するのか。

その前提に立ち，3氏の提案をふまえながら授業を組織・改善していくための基礎的・実証的データを提供していく授業研究の方法論の構築に向けて，実践家と研究者の協働的な取り組み，第三者が納得できるエビデンスを提示できる量的・質的研究，教材の論理と子どもの心理の統合といった視点が提示された。

授業研究における検証方法の科学化という視点からは，成果の客観化ということと同時に，その成果を広め一般化していくための根拠を明らかにしていくことが課題であると確認された。